

検索法多様化の余燼

——一九世紀近世節用集における——

佐藤貴裕

## はじめに

近世後期の節用集は、早引節用集を軸に展開する。「宝曆新撰」早引節用集（宝曆二（一七五二）年刊）以降、意義分類を廃したイロハ・仮名数引きは、一八世紀後半の節用集界に検索法の多様化を招来したが、早引節用集の版元が板株（近世的版權）を過度に主張して優れた検索法を締め出したため、一八世紀末にはほぼ終息した（佐藤一九九〇）。一九世紀に入ると小型・軽便な早引節用集から差別化するように、従来のイロハ・意義分類の節用集の一部が大體化するが、過熱的な傾向も見せつつ、却って早引節用集をも襲うにいたった（佐藤二〇〇五・二〇〇六）。ただ、一九世紀のありようをよりの確に記述するには、人々が節用集に注ぎこんだ営為を把握するとの目的に照らされてきた諸本について、その存在の淵源が、早引節用集ないし検索法の多様化という一点に集約できるかどうかの検証も必要であろう。このような検討を「近世節用集の一九世紀」のデイティールの記述につなげようとするのが、本稿の目論見である。以下、「仮名数引きの導入法」「仮名順引きと編集」「言語門の細分と詳細目次」「視線移動の単純化」の各節により検討する。

## 仮名数引きの導入法

### 「〔新增四声〕節用大全」広告

この広告は、高田与清「擁書漫筆」（文化二四（一八一七）年刊）付載の伊勢屋忠右衛門蔵版目録にあるものである。

『日本隨筆大成』第一期第一二巻にも影印されており、比較的知られたものといえよう。なお、同名の版本も存するが、この広告の内容を実現したのではない。

数百種の節用集あまねく世におこなはる、といへども誤字(アヤマリジ)かなちがひ、或ハ無用の文字多く、かへつて日用急務の文字を遺漏(ノコシノコス)す。今此書ハ専ら平生要用の文字のミ数千字を増益し、字毎に真字を付し、それに四ツのよミこへをそへ、一字を見て四字を知るの便利とし、且、訓読(ヨミコエ)のかなかずを以て次第し、文字をさくりもとむるの急時にたよりならしむ。此書ハ実に節用集の大全なるものにして俗間日用の至宝なり。(私に句読点をほどし、左傍調は丸括弧に包んで示した。以下同)

「訓読のかなかずを以て次第し」とは、まさに早引節用集の仮名数引きである。高田与清の隨筆を刊行する物之本屋に、同じ検索法の節用集を企画・広告させるほど、早引節用集は魅力的だったのである。ただ、早引節用集の開版後七〇年ほどもたつ時期なので、何件もの版權問題が起き、権利の所在も版權侵害書の処遇も知られていたはずだから、このような広告が軽々に掲げられたとは考えにくく、相応の事情・権利関係があるようにも思われる。

この点、『大全早引節用集』文化一四年版以降の早引節用集の刊記に、須原屋茂兵衛の名が見えるのが注意される。一方『節用大全』は、文政五(一八二二)年刊行、「須原屋市兵衛元株」<sup>(2)</sup>で、刊記には英平吉・伊勢屋忠右衛門ほか二書肆が記されるという(山田忠雄一九六一)。須原屋市兵衛は須原屋茂兵衛の分家なので関わりがありそうだが、一書の版權としては別と見るべきであろう。また、市兵衛家は、文化八年に当主が死亡してまもなく廃業したらしいから(日本古典文学大辞典)、時期の点からも早引節用集と須原屋市兵衛はつながらず、したがって伊勢屋も早引節用集の版權とは関わりがないと考えるのがよさそうである。

検討は尽くせていないが、いまのところ、版權上の特殊事情は確認できない。ひとまず、この広告は、早引節用集を出版・販売する魅力のなせる特異なものと捉えておく。とともに、広告という媒体で、自家開版書の仮名数引きを

謳うという特殊例として注目しておきたい。

#### 『増補改正』早字節用集』尾張永楽屋版

本書はイロハ・意義分類の節用集で、行草一行表示、一面六行取りである。判型は、半紙半切ほどの縦本と、余白を大きくとった美濃半切縦本がある。高梨信博(一九九八)に紹介されており、本としての特徴の詳細はそちらにゆずるが、大坂本屋仲間の記録から天保三(一八三二)年ごろの刊行とする点は、別書の記録を誤認したものである<sup>(3)</sup>。それでは刊行時期が判別できないことになるが、「早字節用集」と命名できたのが、永楽屋が享和三(一八〇三)年に『新板引方早字節用集』(後述)を求版したことに基づくとすれば一九世紀の刊行と見てよく、さらに、尾張書肆による節用集の出版が一九世紀に入ってからであることも考え合わせて、本稿で扱うこととした。

高梨は本書の特徴を次のようにいう。

頭字のいろは分け(部)と意味による分類(門)をおこなう点は古本節用集以来の部門引きであるが、同じ門に含まれる項目を、さらに仮名見出しの字数によって分類、配列している。仮名見出しの字数ごとにその表示をたてる<sup>(4)</sup>ということとはしていないが、これは本文から明らかである。

『新增四声』節用大全』広告とは対照的に、アピールすべき仮名数の標示を設けないのは不自然だが、早引節用集の版元を刺激しないためなのであろう。序文で、仮名数引きの欠点をあげつらうのもカムフラージュであろう。

節用の類ハ世間に数板有て、今般重宝なれ共、たがひに得失有て何れよろしとも極めかたし。声の数にて引ハ早けれども、中にハかの部の二にて(かさ)というふことをさがすに笠傘瘡のうち何れならんと迷ひ、又雲といふ字をさがすとて蜘蛛とあるを見て是なりと取ちがへ、椿と津液、障と月水とを引あやまる類なき(に欠カ)あらず。となへ同じさま、数のミにすがりてひく故なり。今此節用ハ天地人物草木言語など、部をわけ、頭をいろはにやりてひく故、是らの誤なく殊に多く増字をくハへたれハ誠に無双の節用なり。

早引節用集の仮名数引きが魅力的であることは、多くの重版（無断複製）・類版（意匠剽窃）が証するところだが、本書のように事実上仮名数引きを導入しながら、序文では否定して見せるといふ屈折した形をとらせる場合もあることになる。そこに本書の独特の存在意義を見ることができよう。

否定したとはいえ、「声の数にて引ハ早けれども」と利点にも言及するのが興味深い。「数のミにすがりてひく」とあるのも、早引節用集における意義分類の非表示ないし全廃に弊があると捉えたもので、仮名数引きの欠点自体は限定的に捉えているとみるべきところであろう。

とすれば、意義分類と仮名数引きを併用することが、やはり理想としてあったことになる。その形にはいくつかのタイプが考えられ、実際に開版もされている。『いろは節用集大成』（文化一三年序）のようにイロハ・仮名数引き・意義分類でもよい。『偶奇仮名引節用集』（長半仮名引節用集。後述）のようにイロハ・仮名数で引かせ、各語に意義分類を注記するのでもよい。そして、従来のイロハ・意義分類に仮名数引きを追加する形も考えられ、それを具現したのが本書ということになる。

一方、このように、既存のものを取り合わせたり改良したりするニツチな節用集は、一九世紀の尾張版にはまま認められる。『増字百倍』懐宝節用集（天保七年刊）は、半切横本の『増字百倍』早引節用集（宝曆一〇年刊ほか）を三切横本に小型化したものであり、『世用万倍』早引大節用集（文化六年刊）は、規模を『増字百倍』早引節用集並みに抑えながら、収載語をほぼ倍の『大全早引節用集』（寛政八（一七九六）年刊ほか）から取捨してあり、『いろは節用集大成』にいたっては『和漢音釈書言字考節用集』一〇卷（享保二（一七一七）年刊ほか）をイロハ・仮名数引・意義分類の三重検索に改めただけでなく、ほぼ全語を半切横本・五〇〇丁に収めつつ、真草二行表示をも実現したのであった（佐藤一九九二）。

こうした尾張刊行書の一環として『増補改正』早字節用集を捉えることもできる。ただ、右の諸本はそれぞれ版権上問題となったが、『増補改正』早字節用集にはその形跡がない。早引節用集の版元に気づかれなかったか、一九世紀ではすでに早引節用集が圧倒的に優位であったため、軽微な抵触として黙認されたのであろう。序文でのカムフラージュや、仮名数標示を設けなかったこともあざかっていられるのかもしれない。

### 仮名順引きと編集

『都会節用百家通』寛政二三（享和元。一八〇一）年刊

本書は、一九世紀の大型本の嚆矢である。大型化自体、早引節用集からの差別化に根ざすものと捉えるので間接的な影響が見られることになるが、ここでは、本稿であつかう他の諸本と同様、語の配列規則に注目する。

節用集における各部言語門内の配列として、字音語について字訓語を配し、字訓語内では複数数字語から単字語の順に配することが多い。が、『都会節用百家通』のア部言語門の字訓語は、仮名二字めの五十音順（段優先）に配されるのである（末尾六語をのぞく）。いま、各語の配列順を通し番号で示し、初めの仮名二字ごとにくざり、それぞれの具体例として二語まで掲げる。

字音語	1ゝあん（安堵・安心）	27ゝあい（愛着・愛欲）	43ゝあく（悪心・悪念）
字訓語	55ゝああ（嗚呼・於戯）	62ゝあか（苟且・白地）	74ゝあさ（浅・遷。「新敷」1語をふくむ）
	101ゝあた（当・丁）	133ゝあな（阿那・大）	149ゝあは（合・併）
	187ゝあや（文・無益）	212ゝあら（露顕・発覚）	169ゝあま（余・羨）
	261ゝあい（阿痛・滅獲）	267ゝあき（明・島）	282ゝあし（悪・凶）
	296ゝあい（豈・豈料）	298ゝあひ（間・際）	330ゝあり（有合・有俛）
			290ゝあち（無味・無快）

343 ㄱあく(飽・厭) 355 ㄱあつ(厚・篤) 378 ㄱあふ(溢・池) 384 ㄱある(歩・歩行)  
 388 ㄱあけ(開闔・不可勝計) 391 ㄱあせ(涸) 392 ㄱあて(充・宛) 398 ㄱあえ(敢・無敢)  
 400 ㄱあを(蒼醒・仰向) 404 ㄱあこ(浮岩・狂浮) 407 ㄱあそ(遊・邀) 411 ㄱあと(迹・跡)  
 423 あへ(無安倍) 424 あや(無益) 425 ㄱあち(無端・無道) 427 あこ(阿漕) 428 あう(阿咩)

一八世紀後半には、早引節用集の版元が版木を買収して開版させなかったが、イロハ(語頭)と五十音順(語末)を併用した『五音引節用集』が企画された(佐藤一九九〇)。したがって、右のような五十音順が認められる『都会節用百家通』は、検索法の多様化期あつての産物と見てよからう。早引節用集への反発から生まれた大型本だが、本書は、検索法の工夫でも、早引節用集の影響が見られることになる、興味深い節用集ということになる。

ただし、ア部以外の言語門では五十音順が採られているとはいえず、前節の『増補改正』早字節用集』の仮名数引きのように、全編にはおよんでいないのであつて、利用者を利用するための工夫ではなさそうである。当然、五十音の仮名標示も設けておらず、利用者向けの説明もない。とすれば、何のために、どのような理由でア部言語門だけに整然たる五十音順があらわれるのかが問われることになる。

本書は、収載語の多いもの、あるいは多く増補されたものである。簡単に増補とはいうが、実作業は煩雑である。増補すべき語が本文にないことを対照・確認しながらの作業になるが、節用集での検索は、イロハ・意義分類で分割された語群から当該語を読み取るのだから、語数の多い言語門では相当の時間と手間を要する。結果として収載語の重複ミスが増える恐れもある。言語門内の、字音語・字訓語、漢字複数字語・単字語、あるいは同頭字語・同訓語などのまとまりを手掛かりにすれば、幾分は効率よく検索できようが、限界もある。

そこで、収載語が即座に引けるようにしてあれば対照作業は格段に容易になる。そのための工夫が二字めの五十音配列だったのではないか。検索のための仮名順導入ではあるが、節用集利用者のためではなく、増補作業時の収載語管理のための導入だったのではあるまいか。<sup>(6)</sup>

であれば、完成品には、五十音順の存在を明記する必要はなく、版權のことを考えればむしろ明記するべきではない。もちろん、各部の言語門でも所属語数が少なければ、対照作業は容易だから五十音順を導入するまでもない。語数が多ければ五十音順を導入して収載語管理に供するが、清書の段階ではそれを故意に乱すことも考えられよう。ただ、ア部言語門だけは、何らかの事情ないし偶然のため、分かりやすい形で露呈したのもあろう。

一応、このような推測が成り立つが、証明する手だてはない。ただ、『都会節用百家通』の版元として、寛政一三年版刊記には吉文字屋鳥飼市左衛門の名があるのが注意される。吉文字屋は、一八世紀後半において早引節用集に対抗するかのようになり、濁音仮名・長音仮名・撥音仮名の有無による検索法を考案し、検索法の多様化に関わりつづけた人物である(佐藤二〇〇二)。吉文字屋の存在により、右に推測した『都会節用百家通』の編集過程も、相応の確かさを帯びるように思われる。また、別途、収載語の原拠や配列の傾向などを検討することで、本書の性格論もおこないつつ、問題点を明らかにしていきたい。

### 言語門の細分と詳細目次

#### 『字貫節用集』文化三(一八〇六)年再版

本書は美濃半切横本だが、各丁上半に「増補画引玉篇」、下半に「字貫節用集」を配する。初版からの体裁で、當時通行の縦本の「頭書」(本文上欄)からの発想であろう。特徴的だが、検索効率とは無縁のようである。節用集での検索とは、イロハ・意義分類で細分された語群から求める語を探したすものだから、見開きことにより多くの語を見せた方が効率がよく、丁をめくる回数も減らせるからである。

その一方で注目すべきは、早く山田（二九六一）が指摘したように、言語門を、口・目・耳・鼻・心・身（体）・手・足・雑の別に細分することである。序にはつぎのような例が載せられている。適宜改行してしめす。

（口）異説。一口同音。辞応返事。（など此類皆口に属する処の字也。依て此二人）

（目）眠。寐。（此類目に属する字義なり。依て此に入）

（耳）韻律。（此類耳に聞処の字義也。依て此に入）

（鼻）軒。呼。吸。（此類鼻に属する字義也。依て此に入）

（心）以心伝心。意味。一趣。（此類心に属す。依て此処に入）（以下略）

言語門は他の意義範疇にくらべて所属語が多くなる。それを検索しやすくするのに、一八世紀の『新增節用無量蔵』『大新增節用無量蔵』では仮名二字めを再度イロハ引きするが、それを意義分類で実現したのが『字貫節用集』再版となる。抽象概念も集まりやすい言語門を、身体部位という身近な具体物で細分したのは優れた着想と評価されよう。早引節用集の登場以来、意義分類は敬遠されがちで、欠点も一層際立ったであろうが、『字貫節用集』再版の工夫をみれば、必ずしもそうとは言えないのかもしれない。

特徴的な工夫のある本書だが、やはり吉文字屋が版元に加わっている。先述のように吉文字屋は検索法の多様化をになった書肆であり、新たな検索法の考案に長けていた。特に、彼の刊行書『大節用文字宝鑑』（宝曆六年刊）と改題改修本『新撰部分節用集』（宝曆九年刊）は、上位分類となる意義範疇を五二種（一門四一類字尽）とするもので、下位分類のイロハ引きが不要なほど少語数の範疇すらある。吉文字屋は意味分類の細分化をすでに一八世紀の段階で実現しており、その手法を『字貫節用集』再版にも応用したのであろう。このような経緯が考えられるのであれば、検索法の多様化期を通過しての工夫と考えるとよさそうである。

#### 『新板引方早字節用集』（享和三年刊）

本書の伝本は少ないようなので、やや詳しく紹介する。半紙半切横本で、行草一行表示、一面八行取り、本文一五八丁の、比較的小規模な節用集である。刊記には、錢屋長兵衛（京都）・勝尾屋六兵衛（浪華）・須原屋茂兵衛（京都）・永楽屋東四郎（尾張）の順に書肆が記されており、永楽屋の次行に「求板」と添えられる。

本書の検索法上の特徴は、従来の意義範疇名を和らげたことにある。「乾坤」ではなく「てんち一山川一あめ一かぜ一ゆき一しも一ミヤ一いゑ一めいしやうの文字」と具体物を平仮名で列挙したり、「言辞」ではなく「つねにもちゆることバの文字一てかミにもちゆるもんじ」のように説明的に示すのである<sup>(8)</sup>。これを、イロハ各部の全意義範疇に掲げるのだが、それぞれに一行を割くという、紙面を贅沢に使った思い切りのよい表示法となっている。

このような工夫を思いつくのは、やはり意義分類を難解なものからなのであろう。煩雑なものとして意義分類を廃した早引節用集の発想に通ずるか、同じ視点に立っていることになる。おそらくは、早引節用集があったからこそ、意義分類の欠点に気づかされ、それを和らげることに思い至ったと考えるのが自然のようである<sup>(9)</sup>。本書もまた、間接的には早引節用集の影響下にあるものと考えられるのである。

ただ、新奇ながらもスマートとはいえない工夫を「新板引方<sup>(10)</sup>」と呼ぶのは誇張のようで、検索法への意識が過熱するあまりの表現とも見える。ところが、二〇〇五年に入手した、開版書肆に永楽屋を欠く一本は、その巻頭に序と「字引目錄」三四丁を備えるものであった。序は次のとおりである。

文字を。さがし求るに心やすくして。また紛しき事なく。早字。引かたの。工夫せし。字引なり。則次に目錄あり。上にいろはの合印あり。下に平かな門部分在。かたはらに。丁付有。但し丁付何十何丁目と云所に。入用の文字あり。早き事を言ば。順風に。帆を上走るにひとし。

巻頭の「字引目錄」は、本文当該箇所に対応する全意義範疇の標を集め、そのすべてに丁付けをほどこした目次となっている。和らげた門名を一行まるまる宛てる本文も贅沢だが、それを再度巻頭に集めて目次を構成するにいたっ

ては冗長と言うべきかもしれない。全丁数の二割を「字引目録」が占めるのも偏向だが、だからこそ編集・企画上の思い切りと評価すれば「新板引方」と名乗るのも理解できないではない。ただ、永楽屋求板本で「字引目録」が廃されているのは、やはり有用性に乏しいと判断されたからなのであろう。

実際、有用な検索法はすでに発案しつくされておき、一九世紀にはこうした工夫も出てくるということなのであろう。これはこれで、検索法の多様化期を経た産物として注目したく思う。

### 視線移動の単純化

『偶奇仮名引節用集（長半仮名引節用集）』（文化元年刊）

本書は『大全早引節用集』（寛政八年刊ほか）を改編した半紙判横本で、早引節用集の版元から類版とされてもいるので（佐藤一九九三）、検索法の多様化期の直接的な影響を受けたものと位置づけられる。そうしたこともあってか、改編ぶりには注目すべきものがある。

まず紙面の upper 段に仮名数偶数字語、下段に奇数字語を配する<sup>(11)</sup>。さらに各段を三段に分かつて計六段とし、上から仮名数二字語・四字語・六字語・一字語・三字語・五字語と配するのを基本とする<sup>(12)</sup>。収載語は横方向に配列されるが、一面八行取りなので見開きでも各段一六語しか一覽できず、実際の検索では延々と丁を繰ることになる。他には求めがたい奇矯なレイアウトだが、「凡例」では次のように発想の経緯が述べられる。

素問曰、人の眼耳鼻ハ左に利き、手足ハ右に利とぞ。是、天の常理なり。今此節用集は、先此理を考得て、<sup>(13)</sup>土貝葉原本の蟹字法に倣て、右より左に横に見る事を格とす。実に、本朝におゐて例なき活法なり。殊に文字の偶奇と、数とを分たれば、世上に流布せる、尋常の節用集とハ天壤の差なること左の引例を見て察給ふべし。

加増		万倍		長半假名引節用集	
院	糸	岩	巖	編	編
愈	戴	况	糸	戒	戒
煩	勞	姨	心	壽	壽
射	松	蘭	胃	威	威
禱	禱	禱	禱	禱	禱
禱	禱	禱	禱	禱	禱

筆者架蔵本

典拠となった『素問』（黄帝内经素問）の一節は、おそらく「陰陽応象大論第五」の次のくだりであろう。

天不足西北、故西北方陰也。而人右耳目不如左明也。地不滿東南、故東南方陽也。而人左手足不如右強也。

天の気は西北では不足しています。そこで西北は陰に属し、右（陰）の耳目はまた左（陽）の耳目の明瞭さに劣ります。地の気は東南方では不足しています。そこで東南は陽に属し、左（陽）の手足はまた右（陰）の手足の強さに劣ります。（石田・白杉監訳『現代語訳黄帝内经素問』上巻、東洋学術出版社、一九九九）

この一節をどう解釈すれば横配列につながるかは明確ではない。単に耳目・手足は左右でバランスをとっているから横配列が具合がよい程度のことであろうか。ならば目・手と左・右の関係は単なるきつかけで、「素問」や「貝葉原本」も権威付けに担いだされただけかもしれない。ひいては、横配列も奇をてらったに過ぎないとも考えられる。

そこでも、通常の節用集での検索を振りかえってみよう。行を単位として縦方向に検索することになるが、どこまでが一語の漢字表記に相当するかを判別しながらの作業になる。近世初期の節用集のように隣接語が空白でくぎられていればよいが、句点様の符合による中期以降の節用集では厄介なことがある。左右の別なく隣接語間にできた間隙に打つ本もあるからで、白抜き符合ならまだしも、読点や黒丸なら点画の一部かどうかを弁別しながらの検索になる。漢字の「形」を知るために引いているのに、「形」に属する部分での判別を強いられるという、ストレスのかかる作業になるのである。行末から次行行頭に移るのも負荷がかかる。下端から上端への大きな跳躍とともに左隣行にずらすことになるが、日常経験するように、同じ行の先頭や次々行に飛ばないよう注意が必要になる。結局、通常の節用集での検索とは、語の境界を的確に把握しつつ、視線の移動を正確にコントロールする高度な作業なのである。

その点、『偶奇仮名引節用集』の横配列には相応の利点がある。隣接語との切れ目は改行がなうのだから極めて明瞭である。目は左右方向に走らせればよく、上下方向での位置はほぼ固定できる。見開き単位に一覧できる語数は大幅に減るので丁をめぐる動作は増えるが、これも、目を上下方向では固定できることの代償とみればよい。よりいえば、本書の工夫のポイントは、目にかかる負担を軽減するため、検索の際に停止しがちな手に、大幅に動作を肩代わりさせることにあるのではなからうか。<sup>(13)</sup> 視覚作業を手の動作に置換する「例なき活法」なのである。

一八世紀後半の吉文字屋の節用集には、表紙・巻頭に配した詳細な丁付け目録を活用すべく、視点の移動を最小限にするよう、丁付けの位置を丁裏右端に配したものがあつた(佐藤一九九六)。エルゴノミクスの着想として注目されるが、『偶奇仮名引節用集』も、これと同等以上の到達点として位置づけうる可能性があることにならう。

## おわりに

本稿は、佐藤(二〇〇五・二〇〇六)では言及できなかった、大型化傾向とは異なる現象を捉えようとするものだが、これが一九世紀節用集や大型化傾向についての記述が完了するわけではない。

高梨(二〇〇九)によれば、他にも注目すべき写本があり、大型本と一括してきた『都会節用百家通』『倭節用悉改囊(大全)』『大日本』永代節用無尽蔵』『江戸大節用海内蔵』の質的な相違や相互間の差別化という内容面での検討も残っている。近時入手した『大日本永代節用無尽蔵』(文久四年版)は薄葉刷りのため通常版のほぼ半分の厚さになっており、大型化を焦るあまり厚い料紙や間紙を用いたり、合冊に走ったりするものがあるなかで、対照的な方向に踏み出したものと考えられ、単に大型であればよいという価値観が見直されつつあることを示してもいよう。結局、近世節用集の一九世紀は、大方の傾向は厳としてあるものの、多様で複雑な相を見せるようにもなっており、記述にあつても注意が必要で、今後の課題として小さからぬものがあることになる。

課題としては別に、本稿とは逆向きの視点での検討も構想中である。つまり、本稿が一八世紀後半に発生した検索法の多様化現象の終焉を一九世紀においてみとめるものならば、一九世紀における大型化現象の芽を一八世紀後半に見いだす試みがなされてもよいはずである。そしてまた、それをするのが周到とも考えている。

注(1) 一九世紀のイロハ二重検索節用集についても当然ふれるべきところだが、すでに佐藤(一九九一・二〇一〇)で詳

述し、本稿の目論見にもかかわる記述があるので割愛することとした。

(2) 「元株」とあるのが気になるが、廃業しても版權を所有することはできるので(開版は本屋仲間構成員に委託する)、そのような状態をさしていったものか。

(3) 高梨は「一河多より、尾州永楽蔵板早字節用売弘メ願出候二付、願書相した、め帳面等印形取之候事」(出勤帳、天保三年八月五日)との記事に依拠するが、当該願書の書名には「早字節用集 真字附」とある(大阪府立中之島図書館編『大坂本屋仲間記録』第一八巻、二四八ページ)。「真字附」とは行草体表示に楷書を添えた真草二行体をいう

- ので、行草一行表示の『増補改正』早字節用集』とは別書である。なお『早字節用集 真字附』は美濃半切横本・一面七行の天保二年刊本であろう。山田忠雄・金沢市図書館などに蔵される。亀田文庫本にも蔵されるが、刊記を欠き、後補した『増字百倍』早引節用集』の表紙により『早引節用集』として登録される。
- (4) 同じ検索法で、仮名数の標示を設けない点も同じ『万代節用字林宝蔵』が、すでに明和三(一七六六)年に開版されている。伝本は多くないが、関西大学・米谷隆史・筆者が蔵する。佐藤(二〇一〇)に本文初丁の影印を掲げたので参照されたい。なお、諸所に蔵される『万代節用字林蔵』は開版書肆は同じだが、別書である。
- (5) 『万代節用字林宝蔵』は、前注のように『増補改正』早字節用集』と同じ検索法だが、絶版に処せられている。検索法の多様化期にあつたため、早引節用集の版元も処分を徹底したのでであろう(佐藤一九九〇・二〇〇四)。
- (6) 『都会節用百家通』言語門では『和漢音釈書言字考節用集』との関係が考えられるが(佐藤一九九七)、それを悟られないよう配列順を機械的に乱すため、仮名二字めの五十音順を採ったとも考えるべきか。
- (7) 縦本の三階版『大広益節用集』(元禄六(一六九三)年刊)では、上段に『増補倭玉篇』、中段に挿絵入り語注、下段に『大広益節用集』を配する。三段の記事すべてが横長になるので『字貫節用集』でもより参照しやすかったか。
- (8) この表示法は永楽屋版『早字節用』(見返・扉。外題、大全早字節用集。文政八年版等)に引き継がれる。
- (9) 『絵引節用集』(寛政八年刊・文政七年版)で意義範疇を絵で標示するのも同趣の目的によるう。
- (10) 「引方」は、通常「引様」(検索法)とするものと同義か。とすれば、ここにも新味を見いだせるか。
- (11) 偶数奇数で収載語を二分するものに『広益好文節用集』(明和八年刊ほか)があり、別に『増補広益好文節用集』(文政年間刊ほか)がある。『偶奇仮名引節用集』はこれらの発展形とも捉えられる。
- (12) 仮名三字・四字語など語数が多いものは、他の字数の語の段をおそい、二段・三段に配されることがある。
- (13) 目と手との共同作業は、序の「人の眼耳鼻ハ左に利き、手足ハ右に利とぞ」とも関連するか、あるいはそうしたことを意図して本書の序は書かれたものか。

参考文献

佐藤貴裕 (一九九〇) 『近世後期節用集における引様の多様化について』『国語学』一六〇  
 (一九九二) 『イロハ二重検索節用集の受容』『岐阜大学国語国文学』二〇  
 (一九九二) 『和漢音釈書言字考節用集』の一展開』『国語学研究』三二

(一九九三) 『近世節用集の類板―その形態と紛議結果―』『岐阜大学国語国文学』二二  
 (一九九六) 『近世節用集の記述研究への視点』『国語語彙史の研究』一五、和泉書院  
 (一九九七) 『近世節用集版権問題通覧―享和・文化間―』『岐阜大学教育学部研究報告』人文科学四五―二  
 (二〇〇二) 『錦囊万葉節用宝』考―合冊の背景―』『岐阜大学教育学部研究報告』人文科学五一―一  
 (二〇〇四) 『早引節用集の危機―明和元年紛議顛末―』『国語語彙史の研究』二三、和泉書院  
 (二〇〇五) 『一九世紀近世節用集における大型化傾向』『国語語彙史の研究』二四、和泉書院  
 (二〇〇六) 『一九世紀近世早引節用集における大型化傾向』『近代語研究』一三、武蔵野書院  
 (二〇一〇) 『高梨信博氏』『近世節用集の写本について』『雑考』『岐阜大学国語国文学』三六  
 (一九九八) 『未紹介の近世節用集の二、三について』『早稲田日本語研究』六  
 (二〇〇九) 『近世節用集の写本について』『早稲田大学大学院文学研究科紀要』五四(第三分冊)  
 山田忠雄 (一九六二) 『開版』節用集(分類)目録』私家版

付記

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(A)「『書物・出版と社会変容』研究の総合化に向けて」(研究代表者・一橋大学大学院・若尾政希) および同(C)「近世辞書の学際的・言語生活史的研究のための基礎研究」(佐藤貴裕)の成果の一部である。